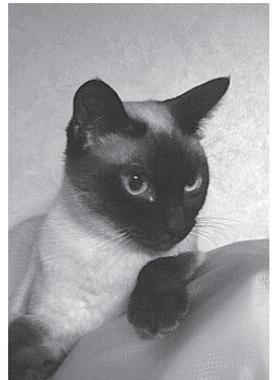


第二回 使動用法でかくれ使役を見つける

河合塾漢文科講師 藤川 左近



1. 句形でない使役は文脈判断？

漢文学習で「使役の句形」というのは基礎中の基礎であって、教える側も教えられる側もなじみのある内容だと思えますが、実際の漢文の中には使役の句形でもないのに使役になっている例が多数見受けられます。例えば「韓非子・説難篇」の、いわゆる「愛憎の主」という文章には衛の靈公に寵愛されていた弥子瑕の行為として、

〔例1〕
 与^レ君^ニ遊^ビ於^二果^園、食^レ桃^ヲ而
 甘^シ不^レ尽^テ以^二其^ノ半^一啗^シ君^ニ。
 (主君と果樹園に出かけ、桃を食べたところ美味しいと思つた。食べ尽くさずに、その残りを主君に食べさせた)

という表現が出てきて、訓読では「啗」を「くらはしむ」と使役に読ませます。この原漢文には「いわゆる使役形」がありませんから、一般的な漢文指導ではこういう場合「文脈によ

って使役になる場合がある」と教えるわけですが、ここは本当に文脈依存で使役になっているのでしょうか。「使役に読んだ方がよいというサイン」が原漢文のどこかにないのでしょうか。今回はその一つについて御説明します。

2. 使動用法とは

前回の品詞の話でも少し触れましたが、中国の漢文教育では「詞類活用」すなわち品詞の活用について詳しく扱います。漢文では前後の文字のはたらきによって品詞が一時的に変化(活用)するのです。その「詞類活用」のなかで特に詳しく指導されるのが、今回説明する「使動用法」と、次回説明する「意動用法」なのです。さて「使動用法」とは「使役動詞に活用する用法」とでも言うべきもので、機能的には大きく分けて二つの側面があります。

第一に、形容詞ないし名詞Pが目的語Oを取ることで、「OをPの状態にさせる」という意味を表すことができるという側面です。

具体的な例を挙げましょう。

〔例2〕
 聖^ノ人^ノ之^ヲ治^ム、虚^ニ其^ノ心^ヲ、実^ニ其^ノ腹^ヲ、弱^ニ其^ノ志^ヲ、強^ニ其^ノ骨^ヲ…
 (聖人による治世とは、民の思考を空にして腹を満たし、志を弱くして体を強くするものだ)
 〔老子・三章〕

「弱」と「強」はもちろん形容詞なのですが、直後にそれぞれ「其志」「其骨」と目的語を取ることによって、「弱い状態にさせる」「強い状態にさせる」という意味の他動詞になったと考えることができます。

そして第二に、動詞Pが使役対象Oを目的語に取ることで、「Oに行為Pをさせる」という意味を表すことができるという側面です。ここで動詞Pに自動詞・他動詞の区別はありません。つまり自動詞でも目的語を取ることが可能ですし、他動詞であっても本来あるべき目的語以外に使役対象をさす目的語を取ることが出来るの

です。

(例3) 死^{セル} 諸葛^{ラシムケル} 走^ラ 生^ラ 仲達^ラ

蜀志諸葛亮伝裴注所引『漢晋春秋』
(死んだ諸葛孔明が生きている司馬仲達を敗走させた)

『十八史略』でもおなじみのこの例では、自動詞である「走」(敗走する)が、目的語「生仲達」を取ることによって、「生仲達」に「走」をさせる(敗走させる)という使役の意味を持たせています。

冒頭に挙げた例1の「以其半啗君」では、「啗」(食べる)という他動詞が、食べる対象でない目的語「君」を取っているので、「君」に対して「啗」をさせる(食べさせる)という使役表現だと解釈できるのです(食べる対象、すなわち直接目的語は前置詞「以」で示された「其半」です)。言ってしまうえば、使役対象を目的語に取ることで使役表現になるわけですから、動詞と目的語との関係性に注目することで数多くの「かくれ使役」を見出すことができます。

3. 「しむ」を送るか否か

ここで注意しなければならないのが、確かに「使動用法による使役表現がある」のに、その訓読には必ずしも使役を意味する「しむ」が含ま

れないという点です。「それじゃあ使動用法で使役を見抜いても意味がないじゃないか」とお思いの方がいらつしやると思いますが、少しお待ちください。まずは実態を整理します。

形容詞や名詞からの使動用法では、多くの場合「しむ」を送る必要があります。例2でも「弱くす」「強くす」とサ変動詞にすることで十分意味が通じます。形容詞「正」「遠」などが使動用法を起こした場合「正しくす」「遠くす」ではなく、「正す」「遠ざく」という適切な他動詞があるのでそちらで読みますが、やはり使役の「しむ」は不要です。

また動詞からの使動用法でも、「しむ」を送らずにすんでしまうことが多々あります。例3では「走」を「走らしむ」と訓読しましたが、実は下二段動詞「走らす」で訓読しても差し支えありません。

このように「しむ」が送られたり送られなかつたりする現象は、実は使役表現の定義と翻訳に起因する根深い問題なのです。

日本語では、使役の助動詞を用いた表現を使役と定義しますが、そもそも使役か否か明快に決めかねる表現が多々あります。例えば文語の「あはず」は、「結婚させる」などの意味で考えれば使役と考えられますが、「絵を合わせる」などの意味で考えれば他動詞とも考えられます。英語では使役動詞を用いた表現を使役と定義しますから、例えば

I got Tom to repair my bicycle.

という文だと、使役動詞 set を用いた使役文と扱われます。しかし日本語訳では「トムに自転車を修理させた」と使役で訳出するよりむしろ、「トムに自転車を修理してもらった」と使役にしない表現が好まれるのではないのでしょうか。

日本語の使役と英語の使役とは、カバーする範囲が違うのです。

漢文法における使役は定義が煩瑣なので説明を省略しますが、使動用法は使役表現の一つであると定義されます。しかし使動用法による使役文を訓読するときには、先の英文和訳と同様に必ずしも使役で読まないということなのです。要するに訓読で「しむ」が送られたり送られなかつたりするのは、そもそも日本語において使役表現と他動詞を厳密に使い分けることが困難であることに加え、漢文法と訓読文法とで使役表現の定義が異なっていることから生まれる問題なのです。

ただし少なくとも使動用法を知っていれば、語順に気づくことで使役になりそうな箇所(の一部)に気づくことができ、そこで「しむ」と送るべきかどうか判断できることとなります。漫然と「文脈で判断」と片づけて読み落としてしまうより遙かに正確で確実です。そうした次第で使動用法は、語順に注意して文意を考えるという漢文の本質的理解に一步近づくことができる、重要な知識・技術だと言えます。